雙星駕彩輪・君のそばには僕がいる僕のそばには君がいる星ふる夜は君と僕とのかたりあいこんやは君と夢みたいこんやは君とかたりたい（自作）

Ｈ２年 1990年 42才　　第26回創玄展（1990）（182×79）

第三回別府大学書道席上揮毫大会の意義

別府大学講師　荒　金　大　琳

日本の書はこれまですごい勢いで進歩してきました。しかし、書教育の立場から見ると、現在のその姿の内情に数々の問題が生じています。

現代科学が進んでいる今尚、書道が躍進しているという現実には、無視出来ません。単に人の趣味としての書道ではなく、生きた文化としての存在意識を高めている書道を確かにしているからでありましょう。又、書を現代文化の中において、固定された物のその一つとして無理矢理に位置づけることによって存在しているのかもしれません。

いずれにしろ書においても不変的な美の追求が存立していることを忘れることは出来ません。しかし、書教育の現場においては、美の多様性とその必要性を感じ、認めながらも尚、書を依然と一つの型にはめる考え方を正当化する所に大きな矛盾があるのです。

A一つの型にはめようとする考え方と、B多様化した美の崇高な表現を行なおうとする考え方の二面の存在に矛盾が起こるのです。書教育において、小・中学校ではAが先行され、高校教育ではBがとられています。この二面が書教育の一貫性を求めている私たちに、いつも付きまとっています。

書教育の中にもう一つ問題があります。それは、人が書写する時その実力が最も充実し、その実力が出現するその位置についてです。枚数を増すことによって出来あがった作品をその人の実力とみるべきか、一枚書くことによって出来あがった作品をその人の実力とみるべきかです。

又、手本の存在であります。実力が最も充実し、その実力が出現する時の手本の存在のことです。

手本を見て書くことが必要なのか、下手でも自分の字を大切に表現すべきなのかの問題もあります。もし、手本を必要とするのなら、手本を必要とするその手本を、古典として重要視するのが大切なのか、師の書を手本として重要視するのか、この手本のこと一つをとってみても大きな問題があります。

今の書教育の現場では、何枚も紙を使用して多く書き続けることに意義をおいています。又、手本においても手本自体を肯定もしています。それはそれで良いでしょう。それならば、私たちは手本としての何を真の手本とすべきなのか、その時手本を古典とすべきならば、その手本たるべき古典はいつの歳から学ぶべきであるのかも重要となってくるのです。

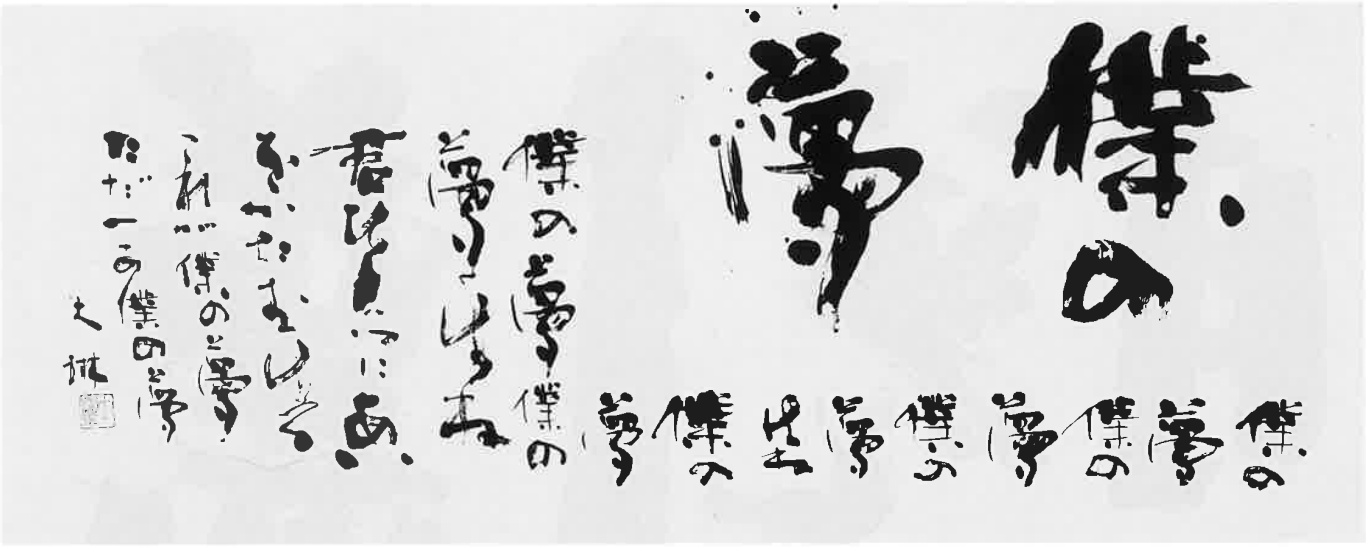
本大会は現存の書教育の現場にて光をあてられていない部分で、尚かつ大切な物事に目を向けたいのです。

その上に立って本大会の原則である（用紙一人三枚であること。）一枚の紙に気を入れることの重要性も無視出来ないという考え方を樹立しています。

この古典を手本とする考え方と一枚の紙に気を入れて書写する

僕の夢

僕の夢僕の夢僕の夢はね
僕の夢僕の夢僕の夢はね
君ひとつにあいをかたむける
これが僕の夢ただ一つの僕の夢



H２年 1990年 42才

第42回毎日書道展（1990）（79×182）

ことの二大重要点については、言うまでもなく現在の小・中学校の書教育の場においては軽視されています。この二点を本大会はクローズアップしています。

本大会の主旨はそこにあります。例えば中学生に古典の臨書を学ばせること、（しかも課題は当日出題）これは本大会の目的の一つです。しかし、この問題も、簡単には進みませんでした。さまざまな問題を生みました。本大会の中学生の課題において、古典を採用し、思い切って実施していますが、いろいろと対処出来ない現実に度々出会いました。多くの質問も耳にしました。参加していただいた指導者の方々には御理解をいただき、感謝していますが、不参加の指導者の方々の中には、中学生に臨書させることは良いと思っていても、それを実施することに踏み切れない現実。その場での課題出題。「こわくて出来ない。」これも実際の声でした。

古典の学習の一般化や古典の底辺での普及実施は、もう中学生まできています。このことは、否定出来ない事実なのです。あと一歩の線を仲々越すことが出来ない現場の悩みも確かです。以前は、大人でも古典の学習は不可能とさえ考えられていましたが、その古典学習も、高等学校においては今では当然の学習感覚となっています。故に、将来は中学生どころか、現在の中国のように小学生においても古典臨書は無理ではないと思っています。そんなところまで書教育は来ていることを真正面にとらえるべきでありましょう。指導者のあと一歩の心構えのところまで来ていると私は思っています。これは私だけの愚想でありましょうか。

書は単に進展を見せているのでなく、書教育はもうここまで発展の色を見せているのです。

私はここで本大会を無理にこれからも実施し何か一つの結論を出そうと思っているのではありません。日本の書がこのように進歩している現在、今こそ私はここで本大会を通じて書教育にいくつかの提言の足跡を残したいのです。このことによって書を学ぶ大勢の方々に、十分書について論議をしてほしいのです。この十分なる議論の大切さを訴えているのです。そして、この書によって今より深く書道について、書教育について考えていただければ幸甚なのです。

別府大学の書道研究は書道の学問的追求のみならず、一般の書教育の原点を色々な行事実行によって考えていきたいと思っています。この書道席上揮毫大会の意義を御理解の上御賛同を願い申しあげ、別府大学の書道研究に対して今以上の御指導御鞭撻の程をお願い申しあげる次第であります。

（平成２年）